スワノウミ　諏訪の海　風至郡前波の海をいふ。能登名跡志に、『此海(前波)も諏訪の海といへり。則諏訪大明神は此所に產し給ふ也。此諸橋の郷に御舊跡あり。』とある。

スワノモリ　諏訪の森　鹿島郡武部にあつた。能登誌に、『此森田之中にあり。昔は諏訪の社ありしが、中比東の山へ移し奉り、今は社なし。此森に大木の杉ありしを伐りたりしが、伐株より一夜の内に長一丈許の杉出て、今大木に成れり。』と記する。

スワハチロウ　諏訪八郎　諱は師文。養父彌平太は本多氏の家士であつたが、自刃して一たび祿を失ひ、後八郎新たに召されて六十石を受け、徒組に班した。明治の初藩兵となり、進んで少尉心得に任ぜられ、横濱に屯したが、後故主本多政均の暗殺せられるに及び、舊臣中復讎を謀つた同志は、八郎に託するにその仇石黑圭三郎の所在探索の事を以てした。是を以て八郎は屢東京に出でゝ探索したが、圭三郎は遁れて東海道に出發し、之を襲擊するが爲に上京した同志をして目的を達せしめることを得なかつた。八郎乃ちその負託に背いたことを耻ぢ、四年十二月十二日營内に在つて自殺した。

スヱ　末　石川郡犀川庄に屬する部落。

スヱザカ　末坂　鹿島郡一齊庄に屬する部落。

スヱノブ　末信　能美郡德橋郷に屬する部落。

スヱヒロノ　末廣野　鹿島郡に在つた。天正十九年遊佐續光能登を侵した時の進路にこの名が見えるが、今明らかでない。

スヱヒロマチ　末廣町　金澤の町名。慶應三年から卯辰山の頂上を平均して市廛を建築し、明治三年七月更に町名を立てた。末廣町はその一である。

スヱマサ　末正　石川郡山島郷に屬する部落。親元日記寛正六年九月に、『杉原伊賀守方知行分水島保内末正名事云々』とあるもこれであらう。

スヱマツ　末松　石川郡中奥郷に屬する部落。邑内に寺垣内と稱する無毛の地があり、法福寺の遺跡であると傳へられた。その附近水田地下に、東西一六米・南北一一米の堂址と認められる敷石があり、周圍に平安朝時代樣式の瓦を發見し、又その東約一八米に塔址があり、水田下に土壇の基底及び傍柱礎の栗石群があつた。當てその中央に存した塔心礎は長徑二米二・短徑一米七を有し、今大兒八幡神社の手洗鉢に使用せられてゐる。この遺址は昭和十四年五月文部省から史蹟として指定せられた。→オホエミョウジン　大兒明神。

スヱミツヤマ　末光山　珠洲郡長橋の部落東方に近い海岸の山。

スヱモリキ　末森記　一册。岡本慶雲著。末森の戰に關する顚末を記し、越前の藩士長見右衛門に贈りたるもの。慶雲は同役に從うた人であるが、過傳が少くないやうである。

スヱモリジョウ　末森城　羽咋郡下吉田に在つた。越登賀三州志故墟考に、『押水北庄吉田村領にあり。末森とは城地の名なり。或は末守にも作る。今猶此城地東の方に平地八間に十一間餘。其西に五間に十一間許。其南に八間に十三四間、是は一段低し。其上に三間餘に三十間許。其西十三間に三十五間許。其西に十間餘に二十間餘。其西に九間許に十一間餘、此所橋門跡あり。但武者屯なし。其西に七間許に十五間餘の平地あり。東の方に道あり、愛宕山へ續く尾也。峰通り次第に卑し。搦手口宿並へ出る坂、大手より長く急也。大手口峰續き尾先長し、今濱へ出る。此下に町口の跡あり。南北前後は皆谷也。尤も土居堅跡所々にあり。』又三州紀聞に、『末森山の峰に古城跡有。加越能堺にして無二の要害なり。之は土肥但馬とて、四萬石領する地侍の城也。土肥は天正十一年柴田方にて、於江州柳ヶ瀬一討死す。其跡を太閤より利家卿へ賜はる也。但馬子土肥四郎左衛門とて、いまだ三歳也。但馬嫡伊豫殺後見すと也。幼少成しと云共、利家公扶持し此城に居る。城代奥村助右衛門永福・千秋主殿たり。』と見える。

スヱモリドノ　末守殿　川尻肥前守の女で、淺野左近の後家は、前田利家夫人の姪であつた。是を以て利家は命じて末森城主土肥但馬に再嫁せしめたが、但馬の柳ヶ瀬役に戰歿するに及び、末守殿と稱せられ、俸百石を受け、寛永十八年に逝去した。

スヱモリノタタカヒ　末森の戰　(一)戰前の形勢—天正十二年德川家康と羽柴秀吉との間に小牧の戰役があつた。この時前田利家は素より秀吉の與黨であつたから、老臣長連龍をして兵を率ゐて赴援せしめたが、己は金澤に留つて越中の佐々成政に備へて居た。爾後兩氏の間は益緊張し來つて、利家側に在つては前田秀繼・利秀父子を加賀の津幡城に、目賀田又右衛門・丹羽源十郎を島越城に、村井長頼・高畠九藏・原田又右衛門を朝日山に、前田秀勝・前田良繼・高畠定吉・中川光重を能登の七尾に、長連龍を德丸に、奥村永福・土肥伊豫を末森に置いて、領境の警備を嚴にした。之に對する成政側の配備は、俱利伽羅の嶺を最前線とし、佐々平左衛門・野々村主水をして之を守らしめ、井波城に前野小兵衛、阿尾城に菊池右衛門武勝・同十六郎、荒山に神保安藝守氏張の臣袋井隼人、守山に氏張及びその子清十郎を置き、己は富山城に居て四方に號令し、八月廿八日先づ佐々平左衛門・前野小兵衛を遣はして、朝日山の嶺を襲はしめたが功を奏しなかつた。利家は九月四日使を秀吉に派して、成政の反狀既に顯れたことを告げしめたが、秀吉は東海の干戈戢つて自ら赴援し得るに至るまで、利家から進んで戰端を開くことなかるべきを命じて八日使を還した。

(二)本役—然るに成政は、この際大軍を動かして末森城を陷れ、加賀・能登二國の連絡を切斷せんとし、九月八日の夜礪波郡澤川に出で、その地の農田畑兵衛を嚮導たらしめて、羽咋郡牛首に向かひ、更に西方庵を先驅として山間を越え、九日先鋒は吾妻野・天神林に進み、本隊は坪井山麓に營を布いた。是に於いて成政は神保氏張父子を川尻に陣せしめて、利家の金澤より來援するを擊退する任に當らしめ、別に佐々平左衛門・前野小兵衛その他をして、城下に迫つて火を放たしめんとしたので、末森城の土肥伊豫以下二百人は突出して悉く戰死し、奥村永福も三ノ丸外に在つたが、衆寡敵すべからざるを以て退却し、而して敵は之を圍繞して凱歌を擧げた。永福乃ち靜かに防守の策を講じ、その子助十郎榮